

河川改修事業における合意形成の重要性に関する研究 ～おさえ井堰周辺水辺環境整備事業を通して～

福岡大学 学生員 ○古賀裕美 福岡大学 正会員 渡辺亮一
福岡大学 正会員 山崎惟義

1. はじめに

行政における住民参加の取り組みは近年に始まったものではない。1970年までは、都市計画、まちづくりは役所の担当者や専門家が行うものであった。しかし、70年代後半になると市民に開かれたものにしようという声が高まってきた。それは、行政だけが一方的に、あるいは一生懸命都市計画や公園を巨額な費用を使い作り上げても、そこで暮らす住民の意見が反映されていないという実情があった¹⁾。現在の都市河川は、コンクリート水路のような無機質なものが多く目立つ。そのような河川に「川らしさ」を取り戻す河川事業を行った例として、神奈川県のと泉川があげられる。整備前、と泉川は矢板護岸で覆われ、まちと川との結び付きもなかった。事業を進めていくにあたり、ワークショップを重ねるごとに地域の住民の結束も高まり、まちと川との結び付きも深まった。結果として、懐かしい自然の水辺空間をつくりだし、今では地域住民の手によって維持管理が行われている。現在ではすでに「住民参加」はスローガンではなくて、実務的な課題となっている。それが時間とコストの浪費に終わるのではなく、結果に反映され、住民の自治意識の高揚につながるものとして機能するような努力が問われている。

2. 目的

本研究を進めるにあたり、福岡県を流れる二級河川那珂川の中流部に位置するおさえ井堰周辺を水辺環境整備するという目的で、那珂土木事務所の協力を得て、ワークショップを行った。本研究の目的としては、以前までにワークショップの課題となっていた²⁾、広域連携の難しさ、意思・思想が異なる各主体との調整、専門性・ノウハウの共有などを改善するために有効な手法を見出すことにある。

3. おさえ井堰周辺の現状

今回のワークショップの舞台となるおさえ井堰は、福岡県を流れる二級河川那珂川の中流部に位置する農業用の取水堰である。福岡県のレッドデータに記載されているニッポンバラタナゴやスナヤツメ、オヤニラミ等が生息し、生態系の豊富な環境になっている。しかし、現在に至るまで放置ゴミの散乱や医療廃棄物の投棄もあり、住民にとって近寄りた場所となっているという現状がある。また、地域住民からも子供が遊べるような水辺公園化を願う声もある。木々が無造作に生い茂る環境の中で、管理者が思うままに改修を行うと生物にとって厳しい環境になる恐れもある。そのために、この地域を日常的に見、知る人の知識を借り、住民と行政がともに事業を進めていく必要がある。

4. 研究手法

4.1 ワークショップ、環境学習の並行開催

実際にワークショップを行うにあたり、ワークシ

ョップは、「趣旨・特徴・構想・結論」と順を追い、全体で4回行うことにした(写真1)。同時に、ワークショップと並行した小学生を対象とする環境学習を行うことにした。環境学習は「現地調査・考察」の2回行い、現地調査では魚類調査やアドバイザーを招いての鳥類視察、そしてパックテストを行った。その後、おさえ井堰周辺が将来どうあってほしいか、絵に自由に描いてもらうことでのヒアリングを行い、それを小学生の意見としてワークショップの中で取り入れることとし(図1)、互いの意見を反映し合うことにした。



写真1 ワークショップの様子



写真2 小学生による現地調査



図1 小学生によるイメージ図

4.2 アンケート調査

アンケート調査は、ワークショップ用と環境学習用の2種類用いた。

①ワークショップ…ワークショップ4回目終了後、参加者に対してのアンケート調査を行った。内容は、主に川への関心度、そして模型の有効性に関する項目について尋ねた。

②環境学習…環境学習参加者に対して、おさえ井堰に関するイメージ・水辺公園化した際どのような遊びをしたいか、意見の収集に重点を置き尋ねた。

4.2 組み換え式生態景観模型制作

参加者との合意形成を図る手段の一つとして景観生態模型の使用がある。おさえ井堰周辺水辺整備事業についても模型を使用した。ワークショップ内で考案された2班分の水辺環境整備のイメージ図、そしてその2班の特徴を持ち合わせて考えた計画案、計3案について生態景観模型を作製した(写真3)。今回、ただ3つの模型を完成させるのではなく、各計画案をパーツ式にすることで組み替え式の模型にした。実在しないものを実際目で見ることができ理解できるという模型の特徴を最大限まで活用した。実際にこの組み換え式の生態景観模型は過去に前例のない非常な有意義な手法であると考えられる。

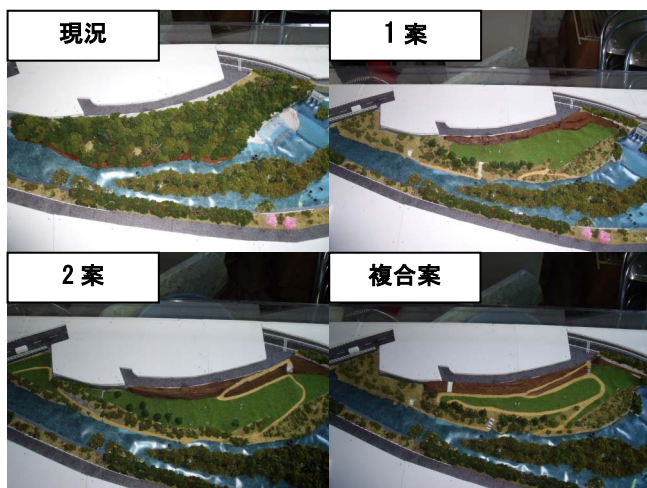


写真3 組み換え式生態景観模型



写真4 ワークショップ参加者への模型の提示

5. 結果及び考察

今回、ワークショップと環境学習を同時並行して開催したことにより、幅広い年齢層のヒアリングに成功した。また、そうすることで各会での参加者の年齢層

が変わり、ワークショップあるいは環境学習をその参加者の年齢層の知識に合わせた内容での開催ができ、効率的なヒアリング・住民の方々への提案を行うことができたといえる。

景観生態模型の使用では、大人も子供も誰にでも目で見て事業内容や経過を平等に把握でき、経験や知識などによる理解度の相違も少なくできる。また、今回のように、模型を組み換え式に仕上げることによって、ワークショップ参加者に模型に触れてもらえる機会を多くしていた。アンケートでは、模型の使用が公園化後のイメージをしやすいとの声が多く挙がった(図2)。そして、ワークショップが必要であると住民の方々からの要望があるという結果(図3)も明らかになった。

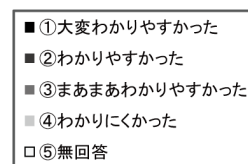
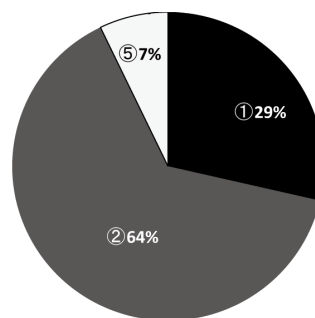


図2 模型を見てイメージしやすかったか

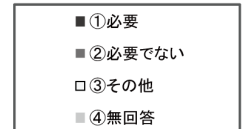
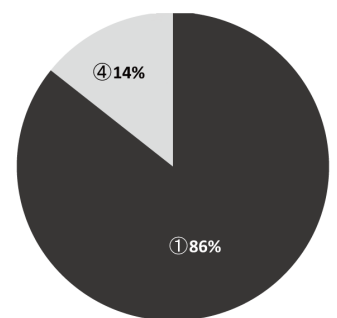


図3 ワークショップが必要か

6. まとめ

住民参加において、ワークショップを行う際にそれと並行した地域小学校対象の環境学習を行うことで、ワークショップ参加者の年齢層の偏りを無くすこと、公園化した際に主体となる子供たちの意見を入れ込むことができること、年齢に応じた開催によって効果的な開催することができること等の利点があることがわかった。これは、問題とされていた「広域連携の難しさ」について解消された事例であると考えられる。また、大人から子供まで誰にでもイメージしやすい場を作り出すことができたと考えている。模型を組み換え式にすることで、各案の比較をやすく、模型に触れる機会を与えることで会話も弾むというメリットが確認できた。これは以前までの課題となっている「意思・思想が異なる各主体との調整」「専門性・ノウハウの共有」をある程度解消したと考える。ワークショップの中での問題はひとつひとつ時間をかけ解消していくことが必要であり、その対応法の継続が今後の課題であると考えられる。

参考文献

1) 中野民夫：ワークショップ—新しい学びと創造の場—、岩波新書、2001。2) 畑田勇貴：河川事業における住民参加と合意形成の在り方に関する研究、福岡大学工学部卒業論文、2007。